〈JBC 各校･クラブ紹介⑰〉

# 防衛大学校ボート部

（文責）鶴野　省三

１．槇校長とボート部の創設

防大ボート部は昭和３３年（1958 年）防大開校６年目の秋、短艇部（別称カッター部）が発展的に解消する形で発足した。ボート部初代顧問 平野 彌三佐（当時；海上自衛官）によれば、昭和３３年某日槇校長から会食に招かれ、「米国海軍兵学校アナポリスがオリンピックで優勝(エイト)したことを取り上げ、防大では一学年全員にカッターを漕がせており、海も近くボートを漕ぐ環境が整っている。将来将校となる防大生にふさわしいスポーツの要件は、①体力の限界を極めるものであること、②常に知能を使うものであること、③チームワークを必要とするものである。ボートはこの要件を満たす世界的広がりを持つスポーツである。それ故、訓練科目としてボートを取り入れたい」と話され、訓練教科としてボートとボート部設立を依
頼された。

平野三佐は槇校長の意を受け、訓練教科ボートとボート部設立に奔走し、昭和３３年１１月ナックルシックス（ＮＳ）2 隻を導入、短艇部を母体とするボート部を発足させた。そして翌昭和３４年４月（1959 年）から訓練教科“撓漕”にボートが加えられた。さらに同年６月にはシェルエイト（シリウス）とシェルフォア(ベガ)、及びコーチ艇が購入され、ボート部としての形が出来上がった。

槇初代校長

槇校長はオックスフォード大学留学、慶応義塾においては体育会理事をされ、スポーツ教育に精通されていた。防大におけるスポーツは団体スポーツが重要であると学生に話されていた。

防大創設時のキャンパスは久里浜駐屯地の一部を間借りしたものであった。現在の小原台に移ったのは 3 期生が入学してからである。したがって、ボート部は防大創設と共につくることはできなかった。

そこで短艇部がボート部への伏線として設立された。したがって、大部分の短艇部員は違和感なくボート部員へ移行した。しかし、短艇すなわちカッターは帝国海軍以来の海軍伝統の競技である。その上全日本カッター競技大会にも参加していたので、短艇部消滅により全日本カッター競技会に出場できなくなることを問題視した訓練部は直轄の短艇委員会を立ち上げた。しかし昭和 35 年度（1960 年）全日本カッター競技大会まで半年しかなく、ボート部は 7 期生部員全員を全日本カッター競技会の漕手として送り出した。

この他に槇校長がボート部設立を企図していたことを示す事がある。それは隅田川で行われている早慶戦に毎年防大海上訓練所の機動艇を支援のため派遣していたことだ。その証拠は偶然にも慶応大学の“クラブ紹介”の 5 ページ（第 26 回早慶戦）の写真（右側）

に写っている。筆者も防大入校直後で、このレースが新聞に大きく報道されたので記憶している。槇校長はボート部創設の布石として早慶戦支援をしていたのであろう。

２．比企能樹コーチ招聘

槇校長は慶応大学ＯＢ日下二郎氏（神奈川県ボート協会３代会長）に相談しメルボルンオリンピックの日本代表エイトクルー比企能樹先生（後に北里大学教授・同病院長・神奈川県ボート協会６代会長）をボート部初代コーチとして招かれた。比企コーチは当時慶応大学医学部大学院生であったが、ローイングのイロハから合宿、全日本選手権出場、対抗戦、遠漕、初漕ぎなど大学ボート部の在り方からボート部員のマナー等、ボート部とは如何なるものかを教授された。比企コーチの指導は５年程であったが、それによって防大ボート部の部風と基礎が出来上がった。

比企コーチは、防大は距離が短いとは言え身近に海上訓練場“ポンド（距離約２００m余）”がある。ドイツのキール大学はキール軍港の距離５００mの水面で練習してオリンピックで優勝した。防大も距離は短いがポンドを往復練習すれば強くなると強調し指導された。それを受け我々は連日ポンドにて短力１０本を繰り返す練習を続けた。

初代コーチ　比企能樹先生

しかし、走水のポンドでだけでは十分な練習ができない。やがて土・日は水辺を求めて出張練習を行うことになった。当初は三浦半島の静かな海面、その後馬入川、でも合宿した。冬・春・夏の合宿は主として相模湖、戸田であった。東京オリンピック後国立艇庫に艇を預けることができるようになってから、戸田でも土日合宿が可能となり、紆余曲折しながら今日に至っている。しかし、時代と共に課業時間が密になり、授業の終業時間が遅くなった。そのためポンドでの平日練習が満足にできなくなり、水上練習時間の確保は頭の痛い問題となっている。

３．戸田デビュー

防大ボート部の初レースは昭和３５年６月（1960）のＴＭＦ３大学レガッタ（東京外語・東京工業・東京商船）に教育大学とともに招待されたエイトレース（１０００m）であった。結果はキャンバス差であったが、敗退した。レース経験の無さが露呈した結果であった。

走水ポンドにおける練習風景（昭和 36 年）

第２戦は同年８月２２日～２３日に開催された全日本選手権であった。この年の全日本はローマオリンピックと重なり、

８＋東北大、４＋東京大クルーがローマに遠征中でやや淋しさを感じる大会であった。

防大は４＋で参加。初戦は法政、一橋と対戦した。結果は３位であったが、敗者復活は比企コーチの“初日敗退は絶対するな”との檄を受け、金沢大、学習院を制して１位で予選突破に成功した。しかし、準々決勝はオリンピック代表の留守クルー東京大クルーに完敗した。

このレース終了後、隣り合わせで合宿していた成城大学と交流し、翌年から対校戦を行うことを約した。このようにして創部以来目標としていた全日本選手権を終えた。

翌年からは毎年全日本を最大目標に活動したが、昭和３７年（1962 年）全日本選手権では４＋で準決勝、ＴＭＦ3 大学レガッタの招待レースで初めて教育大を破り、全日本ジュニア選手権は４＋が決勝 3 位と、年を追うごとに大学ボート部としての形ができてきた。

相模湖合宿(昭和 35 年 12 月(1960.12))

第 3 回全日本ジュニア選手権予選
（手前から東京医科歯科、防大、教育大）

４．防大ボート部が直面する課題・・・水辺と校則の狭間で

４．１　水辺を求めて

このようにして一応順調にボート部としての活動が始まったが、防大は防衛庁の教育機関であるため大学教育課程に加え自衛官教育課程がある。そのため部活動時間が制限され、さらに防大の立地が近くにボート練習場がないこと（水辺が遠い）が部活動にとって大きな障害としてのしかかってきた。

春・夏・冬の合宿は相模湖と戸田で行い、普段の練習はポンドで実施した。しかしポンドは距離 200m 程度しかなか取れなかったので、練習環境としては不十分であった。そこで昭和４０年から三浦半島の小網代湾等静水海面を求めて、週末の合宿を行うようになった。小網代湾などは練習するインフラもなく練習場としては問題があった。そこで近場の練習場の調査を行い、昭和４１年に平塚市馬入川を発掘した。翌昭和４２年（1967 年）から馬入川で週末練習を始めた。

週末練習は授業時間終了と共に昼食を済ませ、ポンドに下り艇をトラックに積み込み出かける。行先は昭和４１年（1966 年）までは、三浦半島の小網代湾、昭和４２年～４９年までは馬入川であった。

春・夏・冬の合宿は相模湖と戸田であった。戸田では旧東大艇庫（昭和４０年（1965 年)、４６年（1971 年））にもお世話になった。昭和４０年の東大艇庫合宿の折、偶然に

も翌年から長期にわたってお世話になった平野力四郎氏の御夫人と出会い、その後の合宿所のお世話を頂くようになった。大山電気の大山愛子様は、その中で最も長く防大に合宿所を提供して頂いた方である。その期間は昭和４７年（1972 年）から６２年（1987 年）に及んだ。

一方、戸田は距離的に遠く往復に時間がかかることから、近場の練習コースを探していると平塚市馬入川近くに篤志家が運営する合宿施設があることが分かり、昭和４２年４月（1967 年）から馬入川の週末合宿が始まった。馬入川は直線約 1500ｍのコースが取れた。このコースに４＋を２はい並べ競争させる練習ができた。馬入川の練習は昭和４９年（１９期生）まで続いた。防大から距離的にも近く、最高の練習環境であった。しかし、残念なことにこの施設は火災で焼失し練習拠点を失った。

大山家の合宿所は昭和６２年(1987 年)まで続いた。馬入川合宿所が消失後は週末練習も大山電気で行った。

昭和６３年からは大山家の合宿に代わり国立艇庫での合宿が始まる。国立艇庫合宿では自炊が認められず３度の食事は外食又は弁当であった。これは栄養面と経費の両面で部活動が圧迫された。

国立艇庫は、その後宿泊クルーの自炊を認めるようになり、これにより合宿は安定するが、夏合宿は年々利用者が増加しており、合宿所の確保は重い課題である。

４．２　コーチについて

防大ボート部は創部以来外部から迎えたコーチは初代比企能樹氏、第 2 代杉原禮彦氏、第 3 代井畔紘一氏、第 4 代江川　正氏の 4 人である。初代から第 3 代までのコーチは、約１５年に亘るが、部の成長期に指導して頂いた。しかし、第 4 代江川氏は 3 代までとは異なる部の再建と言う厄介な問題をお願いした。一方残る半分はＯＢなどによる時代であるが、自衛官は移動が多く、コーチも空白期間が生じやすく、指導の一貫性・継続性を保つことが難しい。

ここでは今後の参考になればとの思いで、お世話になったコーチの事績や成果を整理しながら防大のコーチの在り方を考えてみたい。

（１）比企能樹時代（昭和 33 年秋～38 年）

比企能樹先生が防大ボート部コーチとしての指導された事績やご功績については前述した。ここでは我々が受けた初出場の全日本選手権合宿におけるコーチングエピソードである。何故６０年前の合宿でのコーチングを取り上げるかと言えば、それが防大ボート部の宿命的課題との格闘の始まりだからである。宿命的課題はいくつかあるが、中でも「練習時間が少ない」ことがある。この課題克服がシーズンの成果を決める。

昭和 35 年（1960）夏の第 38 回全日本選手権は防大ボートの実質的な初陣であった。出場種目は４＋のみ。４＋としての練習は夏合宿で始めた。合宿は 8 月 2 日頃に始まった。レースは８月２０～２２日である。レース準備期間は 3 週間。この 3 週間は防大の年間スケジュールの中で許される最長の合宿期間である。今はもう少し少ないかも知れない。

合宿はクルー5 人と飯炊き要員 2 名（キャプテンと筆者）、クルー交代要員はなかった。このとき防大クルーは一度も 2000ｍレースの経験がなく、レース経験は唯一ＴＭＦ3 大学レガッタ招待レース（同年６月１９日）で８＋（1000ｍ）だけであった。しかも７月は１箇月月間訓練でボート練習は全くできなかった。

このような条件で初陣の合宿練習に入った。クルーはコーチのメニューに従って練習するが、レースが近づくにつれ「果たして 2000ｍを漕ぎきれるか」との不安が出てきた。クルーの不安は我々の不安でもあり、2000m のタイムトライアルが必要ではないかと思っていた。

しかし、このとき比企コーチは 2000ｍのタイムトライアルは必要がない。500ｍのタイムトライアルだけで良い。2000ｍは 500ｍ×４だと云われ、2000ｍのトライアルは許さなかった。その結果、初陣ながら 2000ｍを漕ぎ切り予選を突破したのである。

筆者は、この時のことを何故か今も記憶している。それは夏のインカレに臨む防大のクルーに課せられた今も昔も変わらぬ課題であるからであろう。

（２）杉原禮彦時代（昭和 39 年～42 年；昭和 57 年～58 年）

第２代コーチ
杉原禮彦先生

杉原禮彦氏は当時墨東病院院長をされていた。年齢は６０才近くであったと思われるが、遠路走水まで駆けつけ指導された。その熱意は炎のようであった。しかし杉原先生がコーチに就任されたのは運悪く東京オリンピックの年昭和３９年（1964 年）であり、防大生は開会式の入場行進のプラカード要員で刈りだされた。そのため部活動は大きく制限された年であった。

漕艇協会開催のレースも大幅に変更された。全日本選手権はタイミングが合わず出場を断念した。この年に防大が行ったレースは、成城大との対校戦（６月２１日荒川）、ＴＭＦ3 大学レガッタ、全日本ジュニア選手権（共に１１月後半）だけであった。全日本選手権出場断念はその後の部活動に大きな悪影響を残した。夏の合宿が短期間しかできずレースもできなかったことが、次年度を担うクルーの成長を妨げたのである。何事も“穴が空く”ことは弊害を生む。

杉原先生は昭和６年頃（1931 年）の全日本選手権で８＋で優勝した経験を持っておられた。先生はご自身が優勝した時の東大クルーの漕法を度々話された。

それはフィニッシュ漕法であるが、フィニッシュした瞬間に脚と腕の動作が同時に終わる。すなわち脚の蹴りとオールの胸までの引きが同時に終わることがベストと説明され、それを部員に求めた。

杉原先生はその漕法を教えるために錘をつけたロープを、滑車を介して吊るし、そのロープをバック台で引かせた。ロープに吊るされた錘は、ストロークが強いほど勢いよく跳ね上がる。この錘をつけたバック台練習で杉原漕法を指導された。

しかしオールにかかる水の抵抗と空中の錘の抵抗は異なる。クルーは懸命に努力したが杉原漕法を体得することができないまま杉原先生は勤務の都合で昭和４２年（1967 年）にコーチを退任された。筆者は杉原先生の道半ばの無念を思い申し訳なく思った。

ところが、杉原先生は１５年後の昭和５７年（1982 年）にコーチに復帰された。杉原先生の強い希望を受けてのことであったが、この時の先生は心筋梗塞を２回か３回乗り越えた後で、とてもコーチができる健康状態とは思えず躊躇したが、先生の気持ちを尊重することになった。

当時部長であった南沢力教授は、杉原先生の道半ばのお気持ちに応えたいとして、２年生クルー（２９期生）の指導をお願いした。このクルーは同学年だけでエイトクルーが組めた防大史上唯一の期であった。まだエイトクルーとしての練習も始めたばかりの白紙のようなクルーであった。

最初の練習は５月の連休の時に初めて杉原先生と顔合わせをして、指導を受け始めた。ところが秋の全日本ジュニア選手権でこのクルーは８＋決勝３位をかちとった。杉原先生とクルーの練習は付き添いで見守る顧問以外は立ち合わないようにしていたので、この結果は大きな驚きであった。

その後も、先生は病躯を押して走水と戸田で指導された。ところが翌昭和５８年６月、（1983 年）雨が降る戸田で学生を指導された先生は自宅に帰宅後急逝されたのである。最後のコーチを終えた後、今日は良い練習ができたと喜ばれた、とのお言葉を御夫人から頂いたものの。あまりにも突然の出来事であった。

指導者を失ったクルーは、その後 1 年間、杉原先生が乗り移ったかの如く練習に励んだ。亡き先生の教えを守り練習したのであろう防大としては強力なクルーに成長した。クルーは決勝進出を目指し最後のインカレに臨んだ。しかし予選、敗者復活共に伝統校に敗れた。敗者復活は 1,750 までは防大が先行していたが、最後の 100ｍで抜かれた。しかしタイムは 6 分 11 秒と防大新記録を出し、亡き杉原先生の指導に応えた。

（３）井畔紘一氏（昭和 43 年～49 年）とその教え子の時代

井畔コーチは高齢の杉原先生の後であったので、学生たちは兄貴分のように慕い指導を受けた。この時期は馬入川の練習拠点を発掘したこともあって、河口の約 1,500ｍの直線コースに、４＋を 2 はい並べて競争させた。この練習は、セコンドクルー（ブラボー）を３艇身先行させ、その後を対校クルー（アルファー）が追わせるのだ。一回の水上練習は約 2 時間で 5～６往復したが、追抜けない場合はやり直しをさせた。そのため追加練習が増える厳しい練習であったが、クルーは逞しく成長した。

第３代コーチ　井畔紘一氏

その結果、昭和４３年の５大学レガッタではオリンピック代表笠木選手を擁する教育大学を破り、４＋の優勝を飾った。それまでは負けるレースが続いていたが、その後は勝つレースが増え、伝統校に伍して戦えるようになった。

５大学レガッタでは昭和４６年（1971）から４８年（1973 年）は８＋で３連覇した。昭和４６年の全日本選手権は優勝した東京大と予選、準決勝と当たりいずれも僅差で負けた。決勝進出はできなかったが、優勝クルーと匹敵する実力を示した。エイトクルーとし

ては防大の頂点であったと思う。

防大ボート部は井畔コーチの時代に一気に力をつけ、強豪クルーと対等に戦えるようになった。第１期のピークの時代であった。この時期は練習環境にも恵まれたが、井畔コーチはクルーの限界に迫る厳しい練習を課し、且つそれを乗り越えさせた。その指導力は卓越していた。部員は井畔コーチに私淑し生涯に亘る交流を行っている。

この時代の経験を振り返ると、いま現在であっても、馬入川と同じ練習環境があれば、強いクルーを輩出できると思う。馬入川の練習は非常に高い緊張感の中で全力を出し切る練習ができたことだ。このような練習は戸田ではできない。また荒川でも難しい。荒川は距離が長く、緊張の持続が難しい。防大のように練習時間が制限される場合は馬入川のような練習環境が最適であると云える。

井畔コーチはコーチ就任８年後に大阪に転属となり、井畔時代は終わった。しかし、その後約１０年間、井畔コーチの薫陶を受けた部員たちが、指導教官で赴任しボート部の指導を行った。

この時期は戸田市の大山電気に合宿していた時代であったが、約２０人が合宿できた。空調はなく夏は蒸し暑く大変であったが、部員たちはそれをものともせず合宿に励んだ。

この間の戦績は井畔時代ほど華々しくはなかったが、一定の水準は維持した。

昭和５５年（1979 年）の全日本軽量選手権で２６期生の４＋が決勝 3 位（銅メダル）を勝ち取った。２９期生は昭和５７年（1982 年）全日本ジュニア選手権でエイト決勝 3 位、同５９年（1984 年）インカレでは強豪クルーと対戦し予選敗退はしたが、エイトで 6 分 11 秒を出し、当時は決勝に残る実力を示した。

２９期を頂点にして、その後のボート部は低迷期に入った。低迷の原因は指導教官等でＯＢの赴任が続かなかったことが大きい。それでも時として救世主が現れ、平成４年（1992 年）インカレで４＋準決勝進出や４０期遠藤正幸がシングルスカルで活躍し命脈を保った。

（４）江川 正氏 （平成 9 年～平成 20 年）

第 4 代コーチ 江川 正氏

江川氏にコーチを依頼したのは平成９年の秋であった。前述したように部活動は低迷し部員は自信を失っていた。江川コーチにはこの状態からの脱却とエイトクルーの育成をお願いした。

江川コーチの漕艇論は、カーボン艇は剛性が強いので、木艇のように漕手の力が艇に吸収されることなく水に伝えることができる。そこでリギングが重要になると学生に説いた。そしてリギング理論とリギングの方法を徹底的に指導した。江川コーチのリギングへのこだわりは角度の異なる傾斜板を製作し、クルー個々人の特性に合わせクラッチの取付け角度を調整させるほどの徹底ぶりであった。

このリギング指導の効果はバランスの改善や漕法・漕姿の進歩として現れた。部員の意識も変化し前向きになった。とは言え、長い低迷で染みついた自信喪失から脱するには時間がかかった。部員の意識に変化が訪れたのは、４７期のエイトクルー（２年）が平成１

２年（2000 年）夏のＯＸ盾レガッタで予期せぬ準決勝進出を果たしたことに始まる。

これを機に徐々に意識が変化し、長く続いた低迷から脱却した。防大念願のインカレへのエイトエントリーは平成１２年に復活した。当時は全日本軽量級選手権もあり、軽量選手権、インカレに挑戦したが、インカレエイトは出漕クルーのレベルが高く予選通過には力が及ばなかった。

したがってエイトによる成果は得られなかったが、防大はあえてエイトにこだわった。それは過去の経験から小艇志向は漕手の層を薄くし部の発展にプラスにならないと考えていたからだ。仮に成果を求めて４＋などにエントリーしていれば、ある程度の実績を残せたと思っている。それは平成１５年６月（2003 年）の全日本選手権で４＋で準決勝に進出したことや平成１５年９月の静岡国体（天竜川）に出場できたことに示されていると思っている。

静岡国体の参加は平成１５年度の防大の年間行事表が偶然にも国体参加が可能な設定になっていた。そこで国体予選の出場を決めた。神奈川県予選では東海大学を破り県代表となった。国体本戦は予選を１位通過、準決勝に進んだ。準決勝は実業団の強力クルーに当たり、敗退した。しかし景勝の地天竜川でレースできたことは大きな収穫であった。

翌平成１６年（2004 年）は国体本戦出場ができない状況ではあったが、学生の強い希望で県予選にエントリーし、再び東海大学と当たるが代表権を得た。しかし本戦出場は辞退した。

平成 15 年静岡国体男子４＋予選（手前が防大）

江川コーチ時代はあえて高い壁のエイトに挑戦し続け、目立った戦績を残せなかった。しかし、長い低迷を脱して部員の自信も高まった。さらに恐らく二度と経験することはないであろう国体参加を果たした。

江川　正氏は平成２０年度（2008 年）まで１２年の長きにわたり、監督・コーチとして尽力頂いた。

防大ボート部を振り返ると、部活動には指導体制の一貫性・継続性が重要であることが

分かる。これも言うは易くして実現の道は険しいが、何とかしてその実現に努めてほしい。

５．対校戦

５．１　成城大学との対校戦

防大は昭和３５年（1960）成城大学と対校戦を結び、翌３６年（1961）に第１回対校戦を実施した。コースは戸田コース（６回）と荒川戸田橋（２回）であった。距離は1,000ｍ。種目は　Ｍ４＋、ＭＮＦであった。両校が対校戦を結ぶ機縁は昭和３５年の全日本選手権の合宿をボート会館で隣り合わせたことにある。

全日本は両校ともに予選は通過したが、翌日の準々決勝で敗れた。そこで折角隣り合わせで合宿した間柄ということで、茶菓子を囲んで懇親会をした。対校戦はそこで両校コーチからの提案されたものであった。

対校戦は翌昭和３６年（1961 年）から昭和４３年（1968 年）まで続いた。しかし、防大が年間行事の関係で継続することが困難になり、成城大に申し入れ中止にさせて頂いた。今も申し訳なく残念なことであったと思っている。

成城大学との対校戦の結果は対校４＋については、成城大学が６勝、防衛大が２勝であった。

５．２　５大学レガッタ

ＴＭＦ３大学レガッタは昭和３３年(1958)に第１回大会が開催された。防大と教育大学は昭和 35 年(1960 年)の第 5 回大会から８＋の招待レースで参加。昭和４１年(1966)から正式メンバーとして迎えられ 5 大学レガッタとなった。

５大学参加により防大は多くの恩恵を受けている。第１点は５大学レガッタがシーズン前半の目標となり５大学時点での自己診断・検証の場であることだ。近年は開催日が４月末と防大としては準備不十分での参加ではあるが、それでも自己診断の場としての意義は変わらない。

第 2 点は、５大学レガッタは参加大学が多いので、開催準備から運営に至るまで各大学が共同で入念な準備をしている。この大会準備が５大学の絆を強め、信頼感を深めている。ボートシーズン終了後にＯＢ・ＯＧを含めた懇親会を数十年に亘って行っているが、これも毎年の積み重ねが 5 大学の交流を深め、次の時代を拓く力となっているように思えるのである。

そこで、筆者が現役であった当時部員に対して、「防大ボート部員を 4 年間全うすると 5 つの大学を卒業したことになるのだ。」との表現で、この 5 大学メンバーである恩恵を話していた。学生にとっては５つの大学に知友を得ることができるとの意味もあるからだ。

６．ＮＰＯ宮ケ瀬湖ボートクラブ

宮ケ瀬湖との出会いは、平成元年９月（1989 年）鶴見川漕艇場フェスティバルで当時宮ケ瀬ダム建設事務所長宇塚公一氏を神奈川県漕艇協会長比企能樹先生から紹介さ

れたことに始まる。以来２０年、防大ボート部合宿所建設と宮ケ瀬湖におけるボートインフラ作りに関わることになった。前半の合宿所建設は筆者の悲願であった。後者は神奈川県漕艇協会比企会長の要請であった。合宿所建設は果たせず苦い思いをしたが、宮ケ瀬湖のボートインフラ作りは宮ケ瀬湖ボートクラブがいままさにその任を担い尽力
してくれている。

宮ケ瀬湖への関わりは、筆者にとっては大仕事であった。その間実に多くの方々から山の如きご支援、ご指導、ご好意を頂き、支えられ働かせて頂いた。中でもボートマンクラブ（ＪＢＣ）は宮ケ瀬湖ボートクラブのメンバーも多いが、宮ケ瀬湖のボート活動インフラづくりとボート普及活動に尽力して頂いた。

ここでは感謝の気持ちも含めエポックメーキングな事例を述べる。

１）東海大学・防大のエイトレース：宮ケ瀬ダム湖完成記念観漕会

これは平成１１年１０月２４日（1999 年）宮ケ瀬湖の利用が一般に公開されたことを受け「宮ケ瀬ダム湖完成記念観漕会」が行われた。発案は東海・防衛両校のコーチである。これが宮ケ瀬湖初のボートレースである。

これは翌日の神奈川新聞で報道された。神奈川新聞社長はローマオリンピック４＋クルーの水木初彦氏であった。水木氏は以後宮ケ瀬湖の紅葉レガッタを記事に取り上げて
頂いた。

２）第１回宮ケ瀬湖でボートを漕ごう会（現在の「紅葉レガッタ」）

前年の東海・防衛エイトレースの実績を広げるため企画したイベントである。

平成１２年１１月（2000 年）中旬絶好の晴天の下開催された。参加者は７０余名であった。このイベントはレースではなく、夫々存分にボートを楽しんでもらう企画であった。これもまた神奈川新聞は翌日朝刊に１ページぶち抜き写真入りの大きな記事で報道して
頂いた。水木社長の計らいであった。

第２回以降はレース形式で開催、平成１４年以降は紅葉レガッタに名称変更した。

３）大学ボート部の紅葉レガッタ協力

第１回宮ケ瀬湖でボートを漕ごう会を実施した当時は宮ケ瀬湖にはボートがなかった。そこで相模湖の神奈川県艇庫から艇を借用し運び込まねばならなかった。これを神奈川県下の東海大・防大のボート部員に協力してもらった。

翌年の第２回大会からは北里大学が参加、続いて共立女子大学も参加してくれるようになった。若い大学生部員は男子は配艇作業、女子は受付、記録、放送などで大会運営を支えてくれた。

４）宮ケ瀬湖ボートクラブ

第１回宮ケ瀬湖でボートを漕ごう会は県漕艇協会主催で行われたが、その運営はＪＢＣのメンバーが主力であった。そのメンバーが中心となり平成１４年（2002 年）ＮＰＯ宮ケ瀬湖ボートクラブを創設した。

宮ケ瀬湖ボートクラブは、春は「観桜レガッタ」、７月中旬に「水上レガッタ」、１１月中旬に「紅葉レガッタ」を行った。現在は、紅葉レガッタのみ。しかし毎土曜日に「土曜漕ぐ会」を実施している。非会員に広く呼びかけ普及活動を行っている。また会員は全国

の社会人ボートレースに参加。海外イベントにも参加し活発な活動を行っている。
５）紅葉レガッタ
　紅葉レガッタは我が国初めての年齢差によるハンデイキャップレースとして実施し継続している。種目はＮＦ，４＋，８＋であるが、８+レースが多いことが特徴である。
６）宮ケ瀬湖ボートクラブ保有艇
　宮ケ瀬湖は当初漕ぐボートがなかった。僅かに愛川高校の２×、１×と東海大学の８＋があるだけであった。従って、湖面はあるがボートインフラはゼロに等しかった。そこで宮ケ瀬湖では各方面に使用していない艇の譲り受け活動を行い、多くの大学や団体の支援でその保有艇を増やした。また老朽化した艇も宮ケ瀬ボートクラブで修復した。

宮ケ瀬湖でボートを漕ごう会（平成１３年（2001））

７．日本ボートマンクラブ（ＪＢＣ）
　防大がＪＢＣに入会したのは第４回のＪＢＣ総会（懇親会：八重洲口北口の国際観光ホテル）であった。同期入会は、学習院大学、成城大学、東京工業大学であった。
　ＪＢＣが設立１０年を迎えた時、世話人猿渡氏、磯畑氏から第４回入会メンバー（学習院・成城・東工・防衛）で記念事業の企画・運営を依頼された。当時防大は鶴見川漕艇場にエイトを置いていた。そのエイトをみんなで漕いで見てはどうかと提案し、それが「久しぶりにボートを漕ごう会」となった。ボートを漕いだ後は生麦のキリンビール工場で懇親会をすると言うものであった。
　　これが意外にも好評で、それ以来ボートを漕ぐ会が続いている。

　なお、防衛大学校艇友会で JBC に加入しているのは、鶴野、矢島、靏田、児玉、宮浦、萩の

６名である。宮崎在住の児玉は世界マスターズレガッタ及び全日本マスターズレガッタ等に、大阪在住の靏田も世界マスターズ、全日本マスターズレガッタ等に JBC クルーとして参戦している。

世界マスターズ（ハンブルグ：2004 年 9 月 5 日）

（完）